

書評

室井尚著『哲学問題としてのテクノロジー——ダイダロスの迷宮と翼』

稲賀繁美

著者久々の快著。大切な問題提起の本。首尾一貫した見通しのなかで、著者の世界観が明快に述べられている。二一世紀の人類の行方を考えようという読者にとっては、格好の状況把握の書となるだろう。著者の極私的な身体感覚への拘りや、この世界に対する違和感が、本書では普遍的な命題へと練り上げられている。まず冒頭から、テクノロジーに対する我々の居心地の悪さが、アトピー性皮膚炎の比喻で把握される。問題は、自己と世界とのあいだの境界をなす皮膚界面の痒みや湿疹なのだ、と指摘される。第二に、知の巨人たちが光を掲げて世界を先導するという、従来の思想(史)の前提そのものの破綻が宣告される。第三に、技術対人間の図式が批判される。外から我々を包み込み、抑圧して、我々をシステムの操



縦士へと還元してしまう巨大な技術連関。それに対抗して、内なる自己本来の姿を擁護し、束縛からの解放を求める人間、即ち「自由な主体」——ハイデガーから、その論敵と目された、サイバネティック創始者、N・ウィーナーにまで共通する、そうした前提が疑問に付される。ここで著者は、ひとつの神学的な前提を立てる。本来死すべき無意味な人間存在は、無意味から逃れ、自らを意味ある存在として納得しようとする。そのため自分の

外部に、宗教なり、真理、正義、社会的義務などを組み上げる。定義からして非本来的なこうしたシステムが文化であり、その文化という外部への帰依あるいは信仰によつてはじめて、人間の「本来的な内部」なる虚構が、事後的に確保されるのだ、と。人間の自由や生の意味づけは、当初から、これら外部システムに依存する。主にブラハに生まれ、サン・パウロで教鞭をとつた、故ヴィレム・フルツサーから得たこの前提のうえで、著者はアーヴィン・トフラー『第三の波』を再読する。産業文明の段階では、なお比較的安定し固定的だつた外部を参照して、人々は自己像を形成してきた。だが、第三の波たるコミュニケーション革命とともに、自己像に揺らぎが生ずる。いまや我々は高速で点滅する無数の情報の断片を、いわば次々と「試着」しては捨て去る動揺にしか、「自己」を見いだせない。

トフラーはこの予言によつて、文化英雄としての地位を得た。だが、ここには皮肉なジレンマがある。というのも文化英雄とは第二の波に典型的な現象であり、トフラー自身の知識人として活躍は、かれの予言した第三の波以前の、古いシステムによつて支えられているからだ。そしてこの矛盾を突く本書もまた、このジレンマから自由ではない。もはや知識人がその特権を剝奪されたこと

を宣言した本書は、話題の書として読まれる特権をも、自ら否認せざるを得ないからだ。その空しさに「根底から白け」た彼方で、著者は何を主張するのか。

旧来の新左翼の論者のなかには、電子情報の自由な授受によつて、従来の支配権力による情報管理が崩壊し、ヴァーチャルな解放区が実現される、との楽天的な夢を描く面々もある。だが解放区確保が利用者保護かを巡つて、法的規制の是非が旧態依然たる議論を起こす。本書はこうした次元の彼方に議論を導く。ネット・サーフィンの実態は、無際限に分散・拡大する情報の海をあてどなく漂流するだけ。その代償として「権威」あるマス・メディアへの回帰・依存症候がかえつて顕著になる。また孤立感を解消するために、自己を外部へと溶け込ませ、抹消しようとする衝動が現れる。外部との接続は、ちようど大きな書店や図書館で感じるのに似た高揚感を約束する。だがそれはしよせん、巨大システムと融合しているという錯覚に過ぎず、個人の体験はなんら増大してはいない。そして幻想としての一体感は、既存のシステムの強化に、我知らず加担することだ。すべてを経験できる可能性は手にしながら、現実には「死すべき三万日弱の孤独な体験」という時間的制約、そして脳のメモリーの限界に阻まれる。ここから「世界がうまく体験で

きない危機」、不充足感がかえって昂進する。

そもそも文化とは、人間の情報処理が生物としての限界を突破した過剰部分であり、それが外部に記憶されたものの集積だ。それを遺伝子 gene との比喩でドーキンスは meme と名づけ、松岡正剛はそれを意伝子と訳した。文化とは、人間が錯乱した動物であることの証拠でもある。第三の波とともに、この過剰は、コンピュータ、ナノ、バイオ、の三分野で臨界に達する。この三種のテクノロジーによって、人間は意識、物質そして生命の編集に直接関与するに至る。それは言い換えれば世界、物質そして生命を加工するプロセッシングを意味する。それが臨界に達したというのは、かつてアドルノが語ったミュンヒハウゼンのパラドックス、つまり穴のなかから自分の身体を自分の手で引っ張り出す、という「神の領域」を侵犯するに至ったからだ。こうした前提に立った著者は、昨今の文化現象を自己サイボーグ化、電子人格の形成による多重人格化として把握するとともに、こうした社会構造に対する余剰を説明できないルーマン流の社会システム論やハーバート・マース流の公共圏の議論の限界を指摘する。そのかなたに本書が示唆するのが、「文化の気象学」なる構想だ。

著者によるこの提言を、ここ二〇年程の哲学史的展開

のなかで納得することは容易だろう。構造主義の破綻は、構造を支える二項対立から余剰として排除され、隠蔽されてきた第三項への注目を招き、それが複雑系やカオスを巡る議論とも接合した地平に、文化を気象現象の比喩で語る視点が現れる。だが、著者はまだ気象学の実践には踏み込んでいない。本書が最後に提起するのは、一方で文化のリエンジニアリング、他方では気象を通じた「自己への配慮」だ。前者は反システム志向においてなお、七〇年代的アルタナティブの、またトランス・システム志向において哲学的伝統の超越論嗜好を覗かせている。またフーコーの遺著を意識させる後者は、昨今の臨床哲学への関心との差異を十分には展開していない。今日の核心を握る議論に肉薄しながら、独自のずれと違和感を大切にして紡がれた体系的思索、その高度の内容を明快に、説得力ある文章で述べる才能は、著者の独壇場で羨望を覚える。しかしそれが、要領の良い一般向き解説と誤解されがちな点に、著者の居心地の悪さもある。

本書が見事に開いた見取り図は、評者もまた多くの部分を共有する。昨年著者にも参加を要請して開催した国際研究集会、「文化の越境」でも、文化の境界に現れる、気象学という「前線」や「界面」に注目し、「風の目」に乘ろうという提言がなされている。もとより生物とし

きない危機」、不充足感がかえって昂進する。

そもそも文化とは、人間の情報処理が生物としての限界を突破した過剰部分であり、それが外部に記憶されたものの集積だ。それを遺伝子 gene との比喩でドーキンスは meme と名づけ、松岡正剛はそれを意伝子と訳した。文化とは、人間が錯乱した動物であることの証拠でもある。第三の波とともに、この過剰は、コンピュータ、ナノ、バイオ、の三つの分野で臨界に達する。この三種のテクノロジーによって、人間は意識、物質そして生命の編集に直接関与するに至る。それは言い換えれば世界、物質そして生命を加工するプロセッシングを意味する。それが臨界に達したというのは、かつてアドルノが語ったミュンヒハウゼンのパラドックス、つまり穴のなかから自分の身体を自分の手で引っ張り出す、という「神の領域」を侵犯するに至ったからだ。こうした前提に立った著者は、昨今の文化現象を自己サイボーグ化、電子人格の形成による多重人格化として把握するとともに、こうした社会構造に対する余剰を説明できないルーマン流の社会システム論やハーバート・マース流の公共圏の議論の限界を指摘する。そのかなたに本書が示唆するのが、「文化の気象学」なる構想だ。

著者によるこの提言を、ここ二〇年程の哲学史的展開

のなかで納得することは容易だろう。構造主義の破綻は、構造を支える二項対立から余剰として排除され、隠蔽されてきた第三項への注目を招き、それが複雑系やカオスを巡る議論とも接合した地平に、文化を気象現象の比喩で語る視点が現れる。だが、著者はまだ気象学の実践には踏み込んでいない。本書が最後に提起するのは、一方で文化のリエンジニアリング、他方では気象を通じた「自己への配慮」だ。前者は反システム志向においてなお、七〇年代のアルタナティブの、またトランス・システム志向において哲学的伝統の超越論嗜好を覗かせている。またフーコーの遺著を意識させる後者は、昨今の臨床哲学への関心との差異を十分には展開していない。今日の核心を握る議論に肉薄しながら、独自のずれと違和感を大切にして紡がれた体系的思索、その高度の内容を明快に、説得力ある文章で述べる才能は、著者の独壇場で羨望を覚える。しかしそれが、要領の良い一般向き解説と誤解されがちな点に、著者の居心地の悪さもある。

本書が見事に開いた見取り図は、評者もまた多くの部分を共有する。昨年著者にも参加を要請して開催した国際研究集会、『文化の越境』でも、文化の境界に現れる、気象学という「前線」や「界面」に注目し、「風の目」に乘ろうという提言がなされている。もとより生物とし

ての「分を弁えぬ」過剰としての「呪われた存在」たる人間が、自分の分泌物よろしく生み出した文化環境に我慢できず、精神的アトピーを起こすのも、あるいは当然なのかもしれない。だが居心地の悪さを界面活性剤で除去するような発想ではなく、むしろ摩擦を空気抵抗として利用し、そこにふわりと翼を浮かべる工夫があってもよいだろう。さらに文化的な自己免疫症を巡る考察もなお必要だろう。「自己」という癒し難い病に、抜本的な治療法はあるまい。だが他者——すなわち自己——との越境・交際術が、あらたな倫理的課題ともなるようだ。次には、文化の気象学概論よりは、著者による実地ナヴィゲイション体験を所望したい。

(西暦二〇〇〇年六月)

以下は校正時の蛇足。①編集部の意向ゆえいたしかたなかったのだろうが、本書は題名でたいへんに損をしている。「文化の気象学にむけて」、「文化気象学序説」に現在の本題を副題として添えるぐらいの方がインパクトがありそうだが。現在の副題は、申し分けないが陳腐で銜学趣味に過ぎる。②拙評末尾の評者の「所望」に対しては、実地は興味がない、という著者からのすげない返事を得た。このあた

りが、とかく要領の良い解説家、高踏な哲学的評論家と「誤解」される著者の資質なのだろうか。③ちなみに知人の或る藝術家からは、八〇年代に出た本か、との印象を持った、という反応があった。実際この二十年、とりわけドイツ圏の藝術家たちは、世の中との接触面の居心地の悪さを、作品として提示してきた。ボイスにしても、ハーケにしても。そして九〇年代には自傷行為の見せもの化と自己解離のテクノロジー化が横行した。著者は一九九八年、リュブリアナの国際美学会総会で、ボリス・グロイス——最近はいりや・カバコフとも共同作業をしている——にケンカを売って見事だった。今日のアート状況にも批判的なまなざしを向けている著者による、アート・マーケットに対する気象学的アプローチ——あるいは自らがその台風の目となること——も、改めて強く望みたい。周囲を大混乱にまきこみながら、自らはぼつかりと抜けた虚なる中心、という意味で。ご参考までに白川昌生(しらかわ・よしお)氏の *Live and Review* 誌への連載、「市場と美術をめぐる問題」の併読をおすすめしたい。(ザールブリュッケンにて、西暦二〇〇一年一月十七日加筆)

(講談社、二〇〇〇年、本体一六〇〇円)

(国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学・比較文化・異文化交渉史)

1 コレクションの記号論と日本のコレクター

シンポジウム1「オーピング」(二〇〇〇年五月二十日)

山口昌男

11

平安時代における知的情報の類聚と集成 ■国風文化の成立と展開

大隅和雄

15

松平定信の文化財情報コレクションと『集古十種』

佐藤洋一

19

書物の集積とその往来 ■満洲から江戸に

岡村敬二

37

石井研堂のコレクションとコネクション(シンポジウムより採録)

坪内祐三

51

ディスカッション1

57

2 コレクションの記号論の射程

近代の国家コレクションと民間コレクションの形成

■東洋／日本美術の収集・展示・露出とその逆説

稲賀繁美

75

チャールズ・ロングフェローと岡倉覚三

■コレクション・エキジビションの場としての身体

クリスティーン・M・E・グート

103

ディスカッション2

121

建物を集める ■シンポジウムを終えて

木下直之

143

“lego”する精神

高山 宏

149

コレクション・記号・フェティシズム

立花義遼

153

『リヒト』を初演したあとで

■ 雅楽の楽器群を始原楽器のコレクションとみて、その構造を解読する多様なコードの発見——木戸敏郎

161

虚構的言説の記号論 ■ 虚構作品における指示再考

河田 学

171

情報のコレクションからセレクションへ

船倉正憲

185

量子力学のコペンハーゲン解釈における記号論的側面

坂本秀人

195

■ 書評

書評 ■ 室井尚著『哲学問題としてのテクノロジー——ダイダロスの迷宮と翼』

稲賀繁美

211

グローバル化の中でのアイデンティティ ■ 立川健二著『ポストナショナリズムの精神』

有馬道子

215

論文紹介 ■ 門内輝行著『街並みの景観に関する記号学的研究』

森 常治

221

■ 日本記号学会二十年の歩み

日本記号学会大会（一九八一～二〇〇〇年）全記録

246

日本記号学会執行部記録（一九八一～二〇〇一年）

247

『記号学研究』一九八一～二〇〇〇総目次

262

コレクションの記号論

記号学研究21／日本記号学会編2001

コレクションの記号論と日本のコレクター
コレクションの記号論の射程

studia semiotica21 ■ Semiotics of "Collection"
the journal of the japanese association for semiotic studies 2001